

『就実論叢』第50号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2021年2月28日 発行

# オンライン授業における通訳と翻訳の相乗効果

**The Synergetic Effect of Interpreting and Translation in Online Classes**

武 部 好 子

# オンライン授業における通訳と翻訳の相乗効果

## The Synergetic Effect of Interpreting and Translation in Online Classes

武部好子 (実践英語学科)

TAKEBE Yoshiko

### キーワード

・オンライン授業 ・通訳 ・翻訳

### 目次

- ・はじめに
- ・1. 対面授業の役割
  - ・1-1. 対面授業における通訳
  - ・1-2. 対面授業における翻訳
- ・2. オンライン授業の効果
  - ・2-1. オンライン授業における通訳
  - ・2-2. オンライン授業における翻訳
- ・3. オンライン授業における通訳と翻訳の相乗効果
  - ・3-1. 通訳と翻訳の相乗効果
  - ・3-2. 対面授業とオンライン授業の差異
- ・おわりに

### はじめに

伝達手段を声とする通訳と、文字とする翻訳が各々に果たす役割と状況は異なる。2020年4月を境に、生身の人間同士が実際に集合して同じ空間で行う授業が当たり前とされていた時代は終わり、物理的には離れていても互いの声と文字を通して伝えあうオンライン授業を駆逐する時代が幕を開けた。対面を主体としていた大学の授業は2020年4月以降オンライン授業に取って代わった。本稿の目的は、2020年度以前の対面授業における役割について通訳と翻訳の観点から紐解き、2020年度以降のオンライン授業における通訳と翻訳の効果を考察することである。最終的には、オンライン授業における通訳と翻訳の相乗効果を明らかにする。尚、本稿で扱うオンライン授業とは「ライブ型」の授業を指し「オンデマンド型」の授業は含まない事とする。

## 1. 対面授業の役割

授業が対面である限り、教員と複数の学生が同一の時間と空間を物理的・身体的に共有し、互いの顔の表情を確認し合いながら言葉を交わす。視覚・聴覚に加えて、実物の資料を触ったり、材料の香りを嗅いだり、作品を味わったり、触覚・嗅覚・味覚も体験することができる。一方、オンラインの授業では画面を通して視覚的・聴覚的に情報を交換し合うことは可能であるが、対面授業のように五感を全て駆使する機会はない。2020年度以前に実施していた対面授業の役割について通訳と翻訳の観点から考察していく。

### 1-1. 対面授業における通訳

五感を駆使した授業展開が可能な対面のクラスでは、言葉を取り巻くパラ言語の果たす役割が大きい。パラ言語とは、表情や身振り手振りなどの非言語を含む副次的言語を指し、通訳や翻訳の伝達ツールである「音声」や「文字」以外の要素である。この言語構造の範囲以外で行われる伝達行為は、通訳の場面においても重要な役割を果たす。対面授業では、言語の異なる話者の間で架け橋の役割を担う「通訳」のトレーニングについて、パラ言語を活用しながら演劇的に指導を行うことができる。

通訳の訓練方法には、聞いた単語を瞬時に声に出して訳す「クイック・レスポンス」、聞きながら影のように追いつながら話す「シャドーイング」、原文を見ながらスラッシュで区切り区切った文章ごとに訳す「サイト・トランスレーション」などがあるが、これらは音声を元に行うため、オンライン授業においても比較的容易に実施できる。

一方、3人組によるデモンストレーションを元にインタビュー形式で発表し合う「リエゾン通訳」の訓練には、対面授業の方がより効果を発揮する。3人組のそれぞれの役割は（1）日本語のみ話すインタビューアー（2）英語のみ話す映画俳優やスポーツ選手（3）日本語から英語／英語から日本語に通訳する「リエゾン通訳」である。特に（1）と（2）を担当する学生に対して、通訳を介さない限り言語では互いに理解し合えない役割だからこそ、アイコンタクトやジェスチャー付きでメリハリを持って明確に日本語または英語を話すように指導を行っている。さらに（3）のリエゾン通訳を担当する学生に対しては、（1）と（2）との間で展開される会話のキャッチボールのラリーが円滑にテンポよく行われ、途中でボールを落とさないように、時には声色を変えジェスチャーを交えながら（1）または（2）の役割を瞬時に演じ切るように訓練を行っている。これはパラ言語の中でも「近接作用」(proxemics)にかかわる要素であり、オンライン授業における「遠隔作用」では体験することのできない演劇的要素を含むパフォーマンス力とコミュニケーション力の向上を目指している。

「対面授業における通訳の魅力」について把握するため通訳・翻訳のクラスを履修する学生を対象に質問を行った（2020年9月23日「英語ゼミナールⅡk」「英語ゼミナールⅣk」／2020年9月29日「通訳演習2」／9月28日「翻訳演習2」：すべて筆者担当科目 受講生計

64名（実践英語学科3年生・4年生）のうち41名（上記科目の重複履修者は一回のみ）の回答（全て自由記述形式）を得た（1人複数の回答）。

その結果、回答数の多い順番に（1）「非言語（表情・ジェスチャー）」（2）「コミュニケーション」（3）「臨場感・身体性」（4）「スキル・意欲の向上」（5）「スピード感・即時性」に分類することができた（【表1】参照）。

【表1】

	〈対面授業における通訳の魅力〉
1	非言語（表情・ジェスチャー）
2	コミュニケーション
3	臨場感・身体性
4	スキル・意欲の向上
5	スピード感・即時性

以下に全回答を分類毎に示す。

（1）非言語（表情・ジェスチャー）：

「通訳者の表情やジェスチャーを面と向かってみることができる。通訳する側も目を見て、聞き手にしっかりと伝えることができる」「ジェスチャーとかで伝えられる」「ジェスチャーを見ることができる」「実際に他者の顔や表情、声のトーンなど多くの部分において直接自分の体を通して理解や知識の深まる傾向においてオンラインに対しより一層物事の本質を捉える」「言語だけでなく、表情や声の調子などの非言語からも読み取ることができる」「対面だと通訳する人が直接伝えたい人に対して目を見て通訳できる」「ジェスチャー込み、意見を交わせる」「相手の表情を鮮明に伺える」「表情やジェスチャーを見ることができるので、声だけでは伝わらない想いや感情が分かり、具体的に通訳することが可能」「相手の表情を自分の目で見ることによって、より感情や気持ちを伝えることができる」「表情が分かりやすい」「相手の表情が見える」「相手の表情とかが読み取りやすい」「目の前に相手がいる、相手の目やジェスチャーや表情を見ながら対話ができる場所」「相手の表情を見ながら通訳できる」「声だけでなく表情からも情報を伝えることができる」「実際に相手のジェスチャーや表情を見ながら通訳をできること」「表情の変化など分かりやすい」「アイコンタクトやジェスチャーなど非言語コミュニケーションが使える」「相手の顔を見ながらコミュニケーションがとれる」「相手のジェスチャーなどの表現方法が見られる」「相手の顔やジェスチャーが見えること」「アイコンタクトがしっかりとれる。感情などが伝わりやすい」「直接対面して声を聞くのでオンラインよりも身振り手振り、トーンなど微妙なニュアンスが伝わりやすい」。

(2) コミュニケーション：

「ペアの人と一緒に相談して考えることができる。皆で発音練習ができる」「想いや感情を伝えることができる」「友達と相談しながら出来る」「声をはっきり伝わる」「友人と直接コミュニケーションが取れ、質問が出てきたらすぐ尋ねることができる」「会話らしさがオンラインの時よりもある」「質問がしやすい。話し合い」「クラスメートとの意見交換や相談時間があり色々な意見がもらえる」「友人に助けてもらえる」。

(3) 臨場感・身体性：

「通訳相手が近くにいるので臨場感がある」「相手との距離感が直接分かるから、その人の特性をつかんで通訳できる」「話している人のテンションがダイレクトに伝わるので、授業の文がすんなり受け入れられる」「相手の反応を見ながらできる」「声のパワーが感じられる」。

(4) スキル・意欲の向上：

「逐次通訳はもちろん同時通訳をすぐに行える」「当てられてすぐに受け答えができてスピーディーな通訳が求められるので集中力を上げることができる」「一人が思い出せなかった単語がすぐに皆で共有することができるので、学べる量が多くなる」「より積極的・意欲的に取り組める」。

(5) スピード感・即時性：

「すぐ返答がくる」「オンラインよりもスピーディーに通訳ができる」「すぐ実践できる」。

上記の回答からも分かるように、臨場感とスピード感を伴う対面授業においては、声を通して発せられる言語よりも、実際の身体全体を通して表現される発話者の表情やジェスチャーなどの非言語が「対面授業における通訳の魅力」として首位に挙げられている。対面授業における通訳の訓練を通して、言語以外の非言語がクラスメートとの密接な一体感を生み、受講生の積極的なコミュニケーション力とパフォーマンス力を底上げし、モチベーションを高めている。

## 1-2. 対面授業における翻訳

文字を伝達手段とする翻訳では、資料を読み訳しながら書くことを中心とするが、筆者が担当する対面の授業では「読む」「書く」翻訳スキルだけでなく、翻訳したものを声に出して発表しあう「聴く」「話す」にも焦点を当てている。この場合、前述の通訳のクラスと同様に、五感を駆使したパラ言語の果たす役割は重要となる。

英語の詩を翻訳する際に注目すべき韻や倒置法、英語の絵本を日本語に翻訳する上で鍵を握る擬音語や擬態語について研究する場合は、より音声に集中できるオンライン授業でも十分に役割を果たしている。

一方、前述の通訳と同様に翻訳においても3人組によるデモンストレーションを元に「起点言語」「目標言語」「非言語」の3要素に分けて発表し合う「視聴覚翻訳」の訓練には、対面授業の方がより効果を発揮する。例えば「難しい英文」を日本語に翻訳する場合、3人組

のそれぞれの役割は（１）難しい英文を声に出して読む学生（２）翻訳した日本語を声に出して読む学生（３）翻訳された文章の意味について、言葉を使用せずに表情・身振り手振り・小道具などを使用しながら非言語で表現する学生が、皆の前で発表を行う。特に（１）と（２）を担当する学生に対して、リズムカルにテンポよくメリハリを持って語尾まではっきりと英語または日本語を発声するように、聴覚的な指導を行っている。さらに（３）の非言語でのみ表現する学生に対しては、「言語のメッセージを非言語（ジェスチャー、身振り手振り、表情、小道具など）に翻訳する「記号間翻訳」（Intersemiotic translation）」（Jakobson 139）の重要性を説明し、起点言語の文章が「難しい英文」である場合は一層分かりやすく、聴覚だけでは理解できない手話のように視覚的かつ身体的に表現するように指導している。これは「身体言語（kinesics）」にかかわる要素であり、前述のパラ言語と同様に、オンライン授業における「視聴覚翻訳」では体験しにくい演劇的要素を含むパフォーマンス力とコミュニケーション力の向上を目指している。

「対面授業における翻訳の魅力」について把握するため通訳・翻訳のクラスを履修する学生を対象に質問を行った（2020年9月23日「英語ゼミナールⅡk」「英語ゼミナールⅣk」／2020年9月29日「通訳演習2」／9月28日「翻訳演習2」：すべて筆者担当科目 受講生計64名（実践英語学科3年生・4年生）のうち41名（上記科目の重複履修者は一回のみ）の回答（全て自由記述形式）を得た（1人複数の回答））。

その結果、回答数の多い順番に（１）「チームワーク」（２）「様々な視点」（３）「資料の確認」（４）「スキルの向上」（５）「非言語」に分類することができた（【表2】参照）。

【表2】

	〈対面授業における翻訳の魅力〉
1	チームワーク
2	様々な視点
3	資料の確認
4	スキルの向上
5	非言語

以下に全回答を分類毎に示す。

（１）チームワーク：

「周りのゼミ生と相談ができる」「周りとは相談し色々な場面で意見交換できる」「皆で協力しながら翻訳できる」「みんなで協力しながら翻訳できる」「みんなで協力できる」「友人と協力しながら取り組める」「ズレがなく、友達と相談しながら出来る」「友人と相談しながらできる」「友人に助けてもらえる」「分からないところがあった時に隣の人と相談し解釈がより明確になる」「分からないときに相談しやすい」「すぐに人に分からないところを聞ける」「た

だ和訳するだけでなく友達とディスカッションをして自分の解答をより良いものにすることができる」「クラスメートと話し合って協力できる」「周りからサポートしてもらえる」「友人と直接コミュニケーションが取れ質問が出てきたらすぐに尋ねることができる」「友人とすぐに相談できる」「相談しあえる」「友達と一緒に資料を見ながら活動ができる」「相談しやすい」「周りの人と相談しながら翻訳できるのでスムーズに訳せる。楽しい」「話し合いやすい」「友達と相談しながら分からないところを協力しながらできる」。

(2) 様々な視点：

「意見や考えを皆で共有しやすいため、様々な観点や視点から考えることができる。様々なボキャブラリーに触れることができる」「自分の翻訳した文の言い方と他の人が翻訳した文の違いをすぐに知ることができる」「他の人の訳と自分の訳の違いにすぐ気づける」「先生に質問しやすい」「人と見比べながら受けることができる」「皆で意見を共有できるのがいい」「分からないところをすぐに質問できる」「自分の訳と他の人の訳を比べることができる」「他の人の翻訳も参考にしながらシェアできる」「友達とアイデアを共有できる」「他の意見も聞ける」。

(3) 資料の確認：

「文字を直接見られるから理解がしやすい」「実際に書籍や新聞など直接目で物事を見受けることが出来、またオンラインの様に画面を通した状態よりも一つ優れた形式を取れる」「資料の共有」「資料を見ながら適宜指摘しながら」。

(4) スキルの向上：

「翻訳スキルの向上と予習・復習の習慣がつく」「自分で翻訳して、自分だけでなく他の人にとっても分かりやすいように翻訳しようと思える」「時間内にメモを取る必要がありメモの残し方を工夫できる」「先生の解説が対面授業の方が分かりやすい」。

(5) 非言語：

「ホワイトボードを使うことで印象に残りやすくなる」「授業ならではの板書が見られる」「先生のジェスチャーしながら翻訳するのを見られる」。

以上の回答からも分かるように、実際の資料を直接見ながらクラスメートの様々な視点を円滑に共有できる対面授業においては「チームワーク」が「対面授業における翻訳の魅力」として首位に挙げられた。対面授業における翻訳の訓練を通して、個々に行う翻訳作業では得ることのできない協調性を育み、他者の意見も取り入れたより広い視野を持って翻訳スキルを向上させることができる。

## 2. オンライン授業の効果

対面の授業で展開することのできるパラ言語や身体言語によるコミュニケーション力の向上は、オンライン授業においてどのように補完・強化すべきだろうか。通訳と翻訳の観点から考察していく。

## 2-1. オンライン授業における通訳

前述したように音声を行なう「クイック・レスポンス」、「シャドーイング」、「サイト・トランスレーション」などの通訳訓練方法は、オンライン授業においても比較的容易に実施できる。

またニュースの通訳では画面の映像と英語音声に合わせて日本語に同時通訳する練習を行ったが、対面授業の時よりも円滑に実施することができた。これはオンライン授業では受講生たちが「視聴者」であることを意味している。つまり、受講生たちが周囲のクラスメートの目を気にすることなく各自のパソコンまたはスマートフォンの限られた面積のスクリーン上から流れる映像と音声に集中している証拠である。通訳にとって必要不可欠な集中力と瞬発力を育むには最適な環境といえる。

さらにクラスメートが発言する日本語の説明に耳を傾けてメモを取りながら内容を聞き取り、それをある程度の「区切りごと」に英語に通訳する「逐次通訳」の練習を行った際にも、対面授業の時よりも各自のモチベーションが高く、発言力に責任感が見られた。これは互いの表情やジェスチャーなどの身体的・非言語的要素を直接的に感知出来ない分、互いの発言する内容に焦点を当てた結果である。受講生たちがオンライン授業を通して、対面授業において体験できるパラ言語や身体言語を肯定的に排除した結果ともいえる。つまり、言語学者 Katharina Reiss が定義する「言語外基準」よりも「言語内基準」に集中して通訳することが出来たのである。「言語内基準」には「意味的、語彙的、文法的、文体的特徴」があるのに対して、「言語外基準」には「状況、主題分野、時、場所、受け手、送り手、「情動的含意」(ユーモア、皮肉、感情など)」がある。(1) Intralinguistic criteria: semantic, lexical, grammatical and stylistic features; (2) Extralinguistic criteria: situation, subject field, time, place, receiver, sender and 'affective implications' (humor, irony, emotion, etc.) (Reiss 1971/2000: 54-88, Munday 74).

実際に同じ空間で授業を行う際には否が応でも、後者の「言語外基準」は存在感を示し、その場の雰囲気に影響を与え、通訳のよしあしを左右することがある。それに対してオンライン授業では、互いの発言内容しか通訳の手がかりがないため、却って、そのことが功を奏して受講生たちのよい通訳のパフォーマンス力向上につながった。

このことから、オンライン授業では無理に対面授業におけるパラ言語や身体言語の補完を目的とするのではなく、それらの要素を肯定的に排除することによって、「起点言語の内容を瞬時に分かりやすくメッセージとして目標言語を通して伝える」という通訳本来の目的を効率的に達成できるのだ。

「オンライン授業における通訳の魅力」について把握するため通訳・翻訳のクラスを履修する学生を対象に質問を行った(2020年9月23日「英語ゼミナールⅡk」「英語ゼミナールⅣk」/2020年9月29日「通訳演習2」/9月28日「翻訳演習2」:すべて筆者担当科目 受講生 計64名(実践英語学科3年生・4年生)のうち41名(上記科目の重複履修者は一回のみ)



の回答（全て自由記述形式）を得た（1人複数の回答）。

その結果、回答数の多い順番に（1）「音声に対する集中力の向上」（2）「各自の空間・ペース」（3）「スキルの向上」（4）「資料による文字の確認」（5）非言語（表情・ジェスチャー）に分類することができた（【表3】参照）。

【表3】

	〈オンライン授業における通訳の魅力〉
1	音声に対する集中力の向上
2	各自の空間・ペース
3	スキルの向上
4	資料による文字の確認
5	非言語（表情・ジェスチャー）

以下に全回答を分類毎に示す。

（1）音声に対する集中力の向上：

「お互いの顔が見えないため、音声で聞こえる音に集中しやすい」「声に集中できる」「画面越しの距離が同じなので声がよく聞こえて通訳しやすい」「声に集中する」「音の調節ができるので声聞き取りやすくなる」「声に集中するので対面以上に聞き取れる」「声に集中」「声に集中できる」「声に集中できる、発言を聞き逃さない」「声に集中できる。イヤフォンなどを使うと良く聞こえる」「音声に集中できる」「発表者の意見をしっかり聞こうとするので、より集中できる気がする」「どれだけ声だけで伝えることができるか（声の大きさ、抑揚、話し方、リズム）」「音声に集中してリスニングができる」「発言者が分かりやすい」「会えない分、授業に集中できる」「声に集中できる」「文章を集中して聞ける」「ミュートにすれば一人で声を出して読むことができる」「オンラインでは自分しかいないので、やる気のある人とない人の差が出やすい。先生の声しか聞こえないので集中しやすい」「個人にスポットが当たるので、より意見に耳を傾ける」「皆の声が均一に聞こえる」「邪魔が入らない」「先生の発音や質問がはっきり聞こえる。より集中度が高まる」「直接的に他者とのコミュニケーションを取ることは難しい場面であるが、オンライン画面を通して実際に他者の声を聞きお互いに会話を行うことに関しては対面の場合と比べても引けを取らず良い点が多く存在する」。

（2）各自の空間・ペース：

「画面越しのため対面より緊張が少なく積極的な発言ができる。場所を必要としない」「リラックスして通訳できる」「オンラインだと全国どこでもつながれる」「シャイな人はより自分をさらけだせるかもしれない」「自分のペースでできる」「自分のスペースでよりリラックスして授業を受けられる」。

(3) スキルの向上：

「相手が目の前にいる時よりも話や表情が伝わりにくいため、より分かりやすく明確に伝わるような通訳ができる」「特に大切な点はどの部分かを対面でより分かりやすく伝えようと強く意識したため、起承転結について意識することができた」「画面越しの相手にいかに伝わりやすく通訳できるか自分の技量が問われる」「声ではっきり伝えようとする力がつく」「逐次通訳による通訳スキルの向上」。

(4) 資料による文字の確認：

「自分の分からない単語があったりしたら、一度立ち止まって確認する時間が自分で取れる」「資料に集中できる、調べ物がしやすい」「資料を見つづ訳ができる」「資料を手元に置ける」。

(5) 非言語（表情・ジェスチャー）：

「全員の顔が見られるので、人と向き合った密な話し合いができる」「オンラインだとジェスチャーで伝える通訳の授業がとてもしやすかった」。

以上の「オンライン授業における通訳の魅力」と【表1】で示した「対面授業における通訳の魅力」との比較を以下の【表4】に提示する。

【表4】

	〈対面授業における通訳の魅力〉	〈オンライン授業における通訳の魅力〉
1	非言語（表情・ジェスチャー）	音声に対する集中力の向上
2	コミュニケーション	各自の空間・ペース
3	臨場感・身体性	スキルの向上
4	スキル・意欲の向上	資料による文字の確認
5	スピード感・即時性	非言語（表情・ジェスチャー）

通訳の魅力について最も多かった回答が対面授業においては「非言語（表情・ジェスチャー）」であるのに対して、オンライン授業においては「音声に対する集中力の向上」であった。この「声」を伝達手段とする通訳の訓練においては、対面授業における魅力として挙げられている「コミュニケーション」「臨場感・身体性」「スピード感・即時性」といったメリットが欠けているにもかかわらず、音声に対する感度と意識の高度化に効果を発揮し、オンライン授業においては「スキルの向上」が対面授業よりも順位が上である。またオンライン授業においては、対面授業における魅力として挙がっていない「各自の空間（スペース）とペース」を確保できる環境の中、通訳の音声を聞きながら「資料による文字の確認」を十分にとれる点がメリットとなっている。更に、対面授業における魅力の首位であった「非言語（表情・ジェスチャー）」はオンライン授業においては通訳本来の言語的役割を果たした上での付随的要素として重要な役割を果たしている。対面授業においては当たり前存在している

非言語的側面が、オンライン授業では「全員の顔が見られるので、人と向き合った密な話し合いができる」「オンラインだとジェスチャーで伝える通訳の授業がとてもしやすかった」というように貴重な情報源として却って注目された。

## 2-2. オンライン授業における翻訳

前述したように、筆者が担当する対面の授業では「読む」「書く」翻訳スキルだけでなく、翻訳したものを声に出して発表しあう「聴く」「話す」にも焦点を当てているため、受講生たちがオンライン授業においても人間味あふれる「視聴覚翻訳」の学びを体験できることを目指している。

対面授業の時と同様にオンライン授業では、翻訳のテキスト・タイプによって訳し方が異なる点を各自が実践的な翻訳活動を通して学ぶ。詩や絵本の文芸翻訳では原文から受けるイメージやリズムを壊さずに訳す「芸術性」が要求され、ビジネス翻訳では一語一語、的確に原文の正しい「情報」を漏らさずに訳し、メディア翻訳では映像を見ながら場面に適した「意識」を行い字数が制限されている為、見る側の視点に立って単に訳す以上の技術が要求される。特に今回のオンライン授業において意識した点は Reiss が言及するテキスト・タイプに沿った翻訳方法の中でも、第4番目の「オーディオ媒体」テキストである：「4）「オーディオ媒体」テキストは、Reiss が「補完」方法と名付けたものを必要とし、文字を視覚映像や音楽で補う」((4)Audio-medial texts require what Reiss calls the 'supplementary' method, supplementing written words with visual images and music (Reiss 1989: 108-9, Munday 72-74))。

対面授業において受講生たちに提示するテキストの歴史的・文化的資料は、広い教室空間のプロジェクターに映し出されている時よりも、受講生のパソコンやスマートフォンの限られた各自の画面に投影されている時の方が、暗闇の劇場空間で映画作品を見ているときのような高揚感と集中力を受講生にもたらす。対面授業における単なる補完資料は、オンライン授業においては「映像」に変身し、上記の Reiss が説明するように視覚映像が文字を効果的に「補完」するのだ。

また各自の翻訳したものを互いに発表し合うプレゼンテーションを実施した際には、各自の資料を画面共有することによって対面授業の時よりも、各自の「映像作品」として披露することが出来た。各自の発表する「声」と「映像」の融合が「視聴覚翻訳」に新鮮な感覚をもたらした。さらに互いの発表に対して意見交換をした際には、受講生たちは対面授業の時よりも一つ一つ言葉を選びながら真剣に向き合うことが出来た。対面授業では経験することの出来ない「声」に焦点を当てたオンライン授業だからこそ、各自の笑い声・溜息・声量・沈黙などのパラ言語を通して、受講生の人間味溢れる個性や心情が浮き彫りになる。

「オンライン授業における翻訳の魅力」について把握するため通訳・翻訳のクラスを履修する学生を対象に質問を行った（2020年9月23日「英語ゼミナールⅡk」「英語ゼミナール

IV k] / 2020年9月29日「通訳演習2」 / 9月28日「翻訳演習2」: すべて筆者担当科目 受講生 計64名 (実践英語学科3年生・4年生) のうち41名 (上記科目の重複履修者は一回のみ) の回答 (全て自由記述形式) を得た (1人複数の回答)。

その結果、回答数の多い順番に (1) 「各自の空間・ペース」 (2) 「画面共有による確認」 (3) 「集中力の向上」 (4) 「思考力の向上」 (5) 「発声力の向上」 に分類することができた (【表5】参照)。

【表5】

	〈オンライン授業における翻訳の魅力〉
1	各自の空間・ペース
2	画面共有による確認
3	集中力の向上
4	思考力の向上
5	発声力の向上

以下に全回答を分類毎に示す。

(1) 各自の空間・ペース:

「自分に合った環境で楽に受けることが出来る」「自分なりに分かりやすく翻訳できる」「型にはまらない斬新な翻訳ができる。自分のペースで理解できる」「自分のペースでできる」「自分のペースで理解できる」「自分のペースで進められる」「周りに資料がたくさんある」「パソコンを利用して単語を調べることが便利で情報や参考資料もたくさんある」「ネット環境がすぐ近くにあるのですぐに調べられる」「リラックスして授業を受けることができる」「自分のペースで出来る」「ゆっくり資料を見られる」「分からない単語があった時に調べやすい」。

(2) 画面共有による確認:

「画面で見ながら落ち着いて翻訳できる」「パソコンなどで画面共有することで一緒に確認しすり合わせができる」「翻訳された文章をチャット内に残せるので時間に余裕がある」「カメラを通して自分の文章を伝えることができる」「先生の板書が見やすい」「画像も入れるとより分かりやすい」「文字に起こしてもらえる」「映像として客観的に見られる」「聞き逃してもチャットなどで聞き直しができる」。

(3) 集中力の向上:

「個人に集中できる」「話し手が限られるので、その人の話に集中でき、自分で必要だと思ったことをメモできる」「周りの音を気にせず集中することができる」「自分の翻訳作業に集中できる」「集中しやすい」「雑音がなく翻訳での世界観に集中できる」「雑音がないので文に集中しやすい」「翻訳しようとする意見をしっかり聞こうとするので、リスニング力が鍛えられる」。

(4) 思考力の向上：

「他の皆との共有はしづらいかもしれないが、その分先生の講義をしっかりと聞ける。自ら考える力がより養われる」「翻訳スキルの向上と予習・復習の習慣がつく」「一人一人が当てられてから話すので、一文をゆっくりしっかりと考えることができ、より正確な文章や言い方で翻訳できる」「ゆっくり考えることができる」「自分でじっくり考えながら訳などを考えることができる」「一人でゆっくり考えられる」「自分だけで考えるのでスムーズに出来ないときもあったけど自分の力を確かめられた」。

(5) 発声力の向上：

「声に出す」「声に出して言いやすい」「翻訳は文字を主体とするが、音声にも集中するため、書くと話すと体験できた」「当てられたら発表しやすい」「声に出して練習がしやすい」。

以上の「オンライン授業における翻訳の魅力」と【表2】で示した「対面授業における翻訳の魅力」との比較を以下の【表6】に提示する。

【表6】

	〈対面授業における翻訳の魅力〉	〈オンライン授業における翻訳の魅力〉
1	チームワーク	各自の空間・ペース
2	様々な視点	画面共有による確認
3	資料の確認	集中力の向上
4	スキルの向上	思考力の向上
5	非言語	発声力の向上

翻訳の魅力について最も多かった回答が対面授業においては「チームワーク」であるのに対して、オンライン授業においては「各自の空間・ペース」であった。この「文字」を伝達手段とする翻訳の訓練においては、対面授業における魅力として挙げられている「様々な視点」を思う存分自由に共有出来ない分、画面共有による映像を通して確認できる利点があり、集中力や思考力の向上につながっている。また対面授業においては「非言語」も魅力のひとつであったが、オンライン授業においては「非言語」よりも「発声力の向上」が重視された。受講生たちの発表する「声」と資料の「文字」が効果的に組み合わせることによって、翻訳する「文字」を「声」として捉えることが可能となった。したがって、オンライン授業における翻訳作業では、よりリスニング力と発話力も鍛えることが出来た。

### 3. オンライン授業における通訳と翻訳の相乗効果

人間の日々の生活を司るコミュニケーションは「声」や「文字」が混成し、言語以外のパラ言語・非言語からも成り立っている。「日常のコミュニケーション活動においては、意識的か無意識的にかかわらず、物理的および社会・文化的コンテクストの必要条件に応じて、

言語行動と非言語行動がほとんど同時に機能している」(石井 94)。今後、対面授業よりオンライン授業が主流の時代を迎えても、あらかじめプログラミングされた AI やロボットでは実現できない人間固有のコミュニケーション力と表現力を培うことは可能である。

オンライン授業における通訳のクラスでは「声」だけではなく、対面授業では重きを置いていなかった「文字」にも焦点を当てる機会が増えた。その結果、受講生たちはオンライン授業の画面上で原稿の「文字」を十分に確認しながら「声」に変換できるため、「文字」から「声」への細かい通訳プロセスが「視覚化」された。これは通訳・翻訳研究者の Daniel Gile が指摘する様に「スピーチの最中に提示される図やスライド、また講演者のボディランゲージが、通訳者の発話の言語的部分に含まれる以上の手がかりを提供し、より効果的なコミュニケーションを達成するうえで役に立つのである」(ジル 86)。

逆に、オンライン授業における翻訳のクラスでは、資料の「文字」だけではなく、(筆者が担当する対面授業でも強調している)文字が包含する「音声」(英語の韻・発音・イントネーション・日本語の擬音語・抑揚など)にも更に敏感に意識できる場を提供できた。その結果、受講生たちは各自で画面の音量を調整しながら、自分や周囲が発表している「声」と資料の「文字」とを同時に効果的に組み合わせることができるため、翻訳する「文字」を「声」として捉えるプロセスが「聴覚化」された。これはコミュニケーションにおける「パッケージング(packaging)」と Gile が呼ぶものである。「口頭発話におけるパッケージングは、語句、言語構造のほか、声の特徴やデリバリー(特に詩の場合など、語の響きやリズムが「パッケージング」の一部になることもある)、さらにボディランゲージを含めた非言語的な信号や情報、紙面または画面上の図表などからなっている」(ジル 40)。

対面授業のように触覚・嗅覚・味覚を含む五感すべてを駆使することはできないが、その分、視覚と聴覚を最大限に発揮して感性を研ぎ澄ませながら「文字」は「声」を「声」は「文字」を補完し合い、通訳と翻訳の各々の要素が絶妙にセッションしながら、オンライン授業において相乗効果を生んでいる。

### 3-1. 通訳と翻訳の相乗効果

「通訳と翻訳の相乗効果」について把握するため通訳・翻訳のクラスを履修する学生を対象に質問を行った(2020年9月23日「英語ゼミナールⅡk」「英語ゼミナールⅣk」/2020年9月29日「通訳演習2」/9月28日「翻訳演習2」:すべて筆者担当科目 受講生計64名(実践英語学科3年生・4年生)のうち41名(上記科目の重複履修者は一回のみ)の回答(全て自由記述形式)を得た(1人複数の回答))。

その結果、回答数の多い順番に(1)「理解力の向上」(2)「4技能の向上」(3)「視聴覚の効果」(4-1)「リズム感の向上」(4-2)「スピードの向上」(4-3)「語彙力の向上」(5)「架け橋」に分類することができた。

【表7】

	〈通訳と翻訳の相乗効果〉
1	理解力の向上
2	4技能の向上
3	視聴覚の効果
4	リズム感／スピード／語彙力の向上
5	架け橋

以下に全回答を分類毎に示す。

(1) 理解力の向上：

「声と文字の両方において理解が深まる」「文章の内容がより理解しやすくなる」「翻訳することによって相手の気持ちをより考えるようになり、それが通訳の時に相手の感情を様々な視点から読み取ることが出来るかもしれない」「情報を補いよりわかりやすく伝えることができる」「文字だけだと想像しにくいから声も合わせて聴くと、こんな気持ちで話しているんだ、歌っているんだと分かる」「通訳されたものを文章で見ることにより頭で理解しやすくなる」「声に出すことでニュアンスの違和感をなくし、文字を書くことで整理できる」「文字と声の両方から情報が入ってくるので理解しやすく定着しやすい」「通訳は声を聞いて声に出す動作をして、翻訳は文字を読む、書く動作をするが、対面授業やオンラインにおいてそれを声に出す動作も加わり、それについて意見を深めることで自分の理解も深まる」「内容を理解しやすい」「文を読むことによって頭を整理することができる。文字を読むことによって確認できる」「より記憶に残りやすく理解しやすい」「文字を見ながらだと声だけよりもより深く文法など理解できる」。

(2) 4技能の向上：

「言語は「読む・書く・聞く・話す」4技能が重要であるが、声を主体とする通訳と文字を主体とする翻訳を行う事で言語のスキルアップにつながる」「通訳で主に学べるリスニングやスピーキング、そして翻訳で学べるライティングやリーディング、4つ全てを通して英語力が向上する」「4技能が使える」「スピーキング力とリーディング力が上手になる」「文字で翻訳した英語の文章を声に出して読むことで通訳に必要な正確な発音スキルを鍛えることが出来る」「原稿を見ながら読んで書くだけでなく、それを聞くことでリスニングの勉強にもなる」「リスニング力とリーディング力が上がる」「通訳では発音や読むスピードの能力が向上し、翻訳ではたくさんの表現と接することができる。この二つをすることで英語そのものを理解しマスターできる」「声で訳したものを翻訳で文字におこして整理できる。一気にリスニングとライティングが鍛えられる」「翻訳で文章を書けるようになれば、通訳での会話もよりすらすらとできるようになる」「文字を読めるのがスムーズになると文が聞こえやすく、聞こえやすくなると話しやすくなる」「頭の中で考えて発言する通訳と、文字

として書き出す翻訳によってインプットだけでなくアウトプットできている」。

(3) 視聴覚の効果：

「実際に自分の口で発音し、その音を聞くことで頭に残りやすくなり、文字を書くことで視覚的にも覚えられるようになる」「目が不自由、耳が不自由な人たちとのコミュニケーションを円滑にする」「目と耳の両方を使うことによってより良い訳ができる」「視覚と聴覚から同時にアプローチするので多くの情報が伝わる」。

(4-1) リズム感の向上：

「映画の字幕翻訳をする場合、実際に声を聞いて俳優がどんな声色で台詞をいっているかが分かると、文字だけでも臨場感のある翻訳ができる」「通訳のように声に出して読むことで文字を見たときにリズムが分かる」「声に出すことで正しい発音が身につく相手へ伝える声の抑揚やリズム、区切りなどが身につく」。

(4-2) 「スピードの向上」：

「英日、日英がぱっと思いつくようになる」「日英の訳が頭の中で早く変換することができるようになる」「文字を読んですぐに口に出すことができるようになる」「通訳は瞬時に言語を変換する力が必要とされるため通訳を学ぶことで翻訳をするスピードの向上が期待できる」。

(4-3) 「語彙力の向上」：

「様々な表現を学べる」「書く文章と会話する言葉の違いによって単語量が増え、文章を訳す時により綺麗な文章を作ることができる」「翻訳には膨大なボキャブラリーが必要とされるため翻訳を学ぶことによって通訳をする際の言葉の選択の幅が増え綺麗な言葉を選択できるようになる」。

(5) 「架け橋」：

「言語の違う人々の架け橋となる」。

以上の回答からも分かるように、声を主体とする「通訳」と文字を主体とする「翻訳」の両方を訓練する「通訳と翻訳の相乗効果」とは「通訳で主に学べるリスニングやスピーキング」と「翻訳で学べるライティングやリーディング」の言語の4技能を伸ばす事を意味する。五感の中でも特に視覚と聴覚に敏感になり、言語のリズム感・スピード感・語彙力の向上も挙げられている。しかし「通訳と翻訳の相乗効果」の首位に挙げられているのは、これら二位以下に示された自身の言語力の向上ではなく、他者に対する「理解力の向上」であったことは特筆すべきである。通訳と翻訳の両方を訓練することによって、最終的には他者が発するメッセージをより正確に深く理解できるようになる点が「通訳と翻訳の相乗効果」の最大の魅力といえる。さらに5位に挙げられた「言語の違う人々の架け橋となる」ことを受講生が意識している点は素晴らしい回答である。



### 3-2. 対面授業とオンライン授業の差異

以上、「通訳と翻訳の相乗効果」について考察してきたが、最後に対面授業とオンライン授業の差異を明らかにする。まず、以下に【表1】で示した「対面授業における通訳の魅力」と【表2】で示した「対面授業における翻訳の魅力」について比較したものを提示する（【表8】参照）。

【表8】

	〈対面授業における通訳の魅力〉	〈対面授業における翻訳の魅力〉
1	非言語（表情・ジェスチャー）	チームワーク
2	コミュニケーション	様々な視点
3	臨場感・身体性	資料の確認
4	スキル・意欲の向上	スキルの向上
5	スピード感・即時性	非言語

上記の【表8】が示すように、対面授業においては、通訳と翻訳の両者において「他者との直接的かわり」が魅力として挙げられている。これはスピード感と即時性が求められる臨場感溢れる対面授業では、他者の表情やジェスチャーを実際に身体的に確認しながらコミュニケーションを行う通訳だけではなく、他者のアイデアや視点を取り入れながらチームワークを大切にしている。対面授業においても、言語のスキルの向上を超えて重要な位置を占めている。

一方、【表3】で示した「オンライン授業における通訳の魅力」と【表5】で示した「オンライン授業における翻訳の魅力」について比較したものを以下に提示する（【表9】参照）。

【表9】

	〈オンライン授業における通訳の魅力〉	〈オンライン授業における翻訳の魅力〉
1	音声に対する集中力の向上	各自の空間・ペース
2	各自の空間・ペース	画面共有による確認
3	スキルの向上	集中力の向上
4	資料による文字の確認	思考力の向上
5	非言語（表情・ジェスチャー）	発声力の向上

上記の【表9】が示すように、オンライン授業では、通訳と翻訳の両者において「集中力の向上」が魅力として挙げられている。これは各自の空間を確保しながら各自のペースに合わせて授業に臨むことができる環境の中、対面授業の魅力として挙げられた「他者とのコミュニケーション」や「チームワーク」を除外した結果である。通訳本来の目的である「音声に

対する集中力の向上」がオンライン授業の魅力の首位となり、対面授業では希薄になりがちな「資料による文字の確認」も同時に十分に行う事ができる。一方、翻訳本来の目的である「資料の確認」は画面共有することによって広い教室のプロジェクターでは体験できない各自のコンパクトな視野を通して行う点が魅力として上位を占め、音声に集中できるため翻訳の授業においても言語の「発声力の向上」に焦点を当てる事が可能となる。

## おわりに

本稿の目的は、対面授業における役割について通訳と翻訳の観点から紐解き、オンライン授業における通訳と翻訳の相乗効果を考察することであったが、その結果として以下の6点が挙げられる。

(1) 対面授業の通訳におけるパラ言語や、対面授業の翻訳における身体言語は重要な役割を果たし、他者のメッセージを的確に伝える為の演劇的要素を含むパフォーマンス力とコミュニケーション力の向上を目指している。

(2) オンライン授業では「声」を土台とする通訳における「文字」と、「文字」を中心とする翻訳における「声」が逆説的に補完し合い、通訳と翻訳の各々の要素が効果的に組み合わせられている。

(3) オンライン授業では声を通して「聴く」「話す」に集中することが出来るため、受講生の発言力やプレゼンテーション力を伸ばす場を多く提供できる。

(4) 五感の全てを体験できないオンライン授業においては、その分「視覚」と「聴覚」が却って研ぎ澄まされ、受講生の集中力と思考力を養うのに適している。

(5) 声を主体にリスニング力とスピーキング力を伸ばす通訳と、文字を土台にリーディング力とライティング力を培う翻訳の両方を訓練することは、言語の4技能の向上につながる。通訳のオンライン授業では限られた画面に通訳資料を共有することによって通常のリスニング力とスピーキング力に加えてリーディング力とメモを確実にとるライティング力も鍛えられる。また翻訳のオンライン授業ではより声に集中できるため通常のリリーディング力とライティング力に加えて翻訳資料を声に出して発話するリスニング力とスピーキング力も強化できる。

(6) 通訳と翻訳の最大の相乗効果は、自身の言語力の向上ではなく、他者に対する「理解力の向上」であり、言語や文化の異なる人々の架け橋となることである。AIやロボット

武部好子

では具現化できない微細なニュアンスを伴う人間固有の表現力やコミュニケーション力を育むオンライン授業を目指している。

### 謝辞

就実大学人文科学部実践英語学科の英語ゼミナール／通訳演習／翻訳演習のクラスにてご協力くださった学生の皆様に感謝致します。

### 引証文献

Gile, Daniel. *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training*. Revised Edition. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, 2009.

Jakobson, Roman. 'On Linguistic Aspects of Translation'. Lawrence Venuti ed. *The Translation Studies Reader*. Second Edition (pp. 138-143). New York: Routledge, 1959/2004.

Munday, J. *Introducing Translation Studies*. London: Routledge, 2001.

Reiss, K. *Möglichkeiten und Grenzen der Übersetzungskritik*. Munich: M. Hueber, translated (2000) by E. F. Rhodes as *Translation Criticism: Potential and Limitations*. Manchester: St Jerome and American Bible Society, 1971/2000.

---. 'Text Types, Translation Types and Translation Assessment'. (Translated by A. Chesterman) in Chesterman A. ed. *Reading in Translation Theory*, Oy Finn. Lectura Ab., Finland (pp. 105-115), 1989.

石井敏. 「人間と人間、人間と自然、人間と超自然の異文化コミュニケーション」. 『異文化コミュニケーションへの招待』(鳥飼久美子・野田研一・平賀正子・小山亘編). 東京: みすず書房, 2011.

ジル, ダニエル. 『通訳翻訳訓練: 基本的概念とモデル』(田辺希久子・中村昌弘・松縄順子訳). 東京: みすず書房, 2012.

本稿の1-1及び2-1は2020年12月5日に開催された日本通訳翻訳学会第53回関西支部例会「通訳教育ワークショップ」にて発表を行ったものである。